

彼のギリシヤに於けるヒュラミスは、ローマに入つてラケルナとなり、それからサグムとなり、更にバルタメントムとなつて軍時の大元帥の用ゐるものとなつた。ラケルナは吾人の羽織の如く、マントの如きものであつた。サグムは一般の輕服、バルタメントムは緋の華麗な軍服であつた。

ヒマチオンはローマに入つてバラ、ストラとなつて婦人の着る物となつた。當時ローマは華奢を極めた頃であるから、之なども随分立派なものであつたこと、思はれる。

ヒトンはローマに入つてチユニカとなる。

ローマ特有の衣服はメトガである。國民服であつた。其の直径が身長に當る大きな圓形の布である。之を着るのには淺く半圓を打返して、折返した線の兩端に錘を附ける、シーザーもブルタスも之を着て活動したのだが、それには下にヒトンを穿る習がある。着悪いことはギリシヤ服にまさる。

印度の衣服は細長い帯様の布から發達した。總て朽葉色である、特に表裏上下の區別をやかましく云ふ。

この他、袈裟(衣)がある。日本・支那と異り袈裟と衣とは同一なのである。袈裟の種類があつて、三條・五條・七條・九條・十三條・廿五條であつて數の増してゆくのを尊ぶ。之は檀家の寄せる布を接ぎ合すのに依つて各通を生じるのである。そして其の接いだ所が田の字に似てゐるので、また田相とも云ふ。

別に標本に就いて實際の場合の着方を示された

ヒトン、地質麻布、左脇から持つていつて右肩の上でボタンで締め、左手を出して左肩の上で又一つとめる。其時巧に襷を取らなければならぬ。ヒトンを外に折返すミアプロイスとなる、折返した先を裾に錘を附ける。

ヒュラミスはマントの様に着て右肩の上でとめる。

ヒマチオン、地質毛織、三ヤールの幅の一端をさしこいて左肩より前方に垂らす、他端を握りて襷を巧に附け右手を包んだまゝ、左肩にしこい

てから掛ける、若し手紙等を書かうとする時は右手を出して手の下から布を左肩にかけるのである。外出の時は頭にも掛ける、女中等は物品を之の端に包んだ、即ち衣服にも帽子にも風呂敷にもなつたのである。

トガ、前に述べた様に其の直径が身長に三倍に當るさいふ大きな圓形の布だが、これを着るのには淺く折返して折返し線の兩端に錘を附ける、そして折返した方を外に、一端を左肩上から前方に持つて來て地につく程に垂らし、他端を右手の下から左肩に掛けるのである。猶胸の所に前に左肩から垂らして置いた布をチヌスと云ふ。

印度のケサ、一端を右肩にかけ右手を包んで他端を左肩に掛ける。

猶彼のトガに就いてのことだが、トガは禮式の時には頭にかけて着るのである。又官吏の着物は折つた折目に色の筋を附ける。但し葬式の時にはかくす。

ローマの皇帝はパープルー牡丹色である——のトガを着ることになつてゐる。シーザーがポンペイの議事堂で刺された時、彼はこのトガを少し長目に着てゐたこと云ふことである。(文責在幹事)

### □間 一 髪

尋常一年の毳入競争が終つた。審判者は赤組と白組とを相對して整列せしめ、其の真中へバスケットを下ろした。

幼い彼等の頭がキチンと一線をなして、小搖ぎだもしない。審判者は先づ白のバスケットを取りあげた。白い毳を一つづつ取り出すにつれて、白組は一齊に一つ、二つと數へ進んだ。幼い聲は緊張に震へて、幾十人の發聲時間には一髮の差もない。次に數へた赤組も亦全様であつた。白は二十七を、赤は二十二を數へた。

まづ、白組が拍手した。次に、赤白一齊に拍手した。

相對した二列が、張りきつた禮を交換した時、私の眼に熱い涙がにじんだ。

私は此の終日、自己の能力の限界を明に商量する時の痛ましさを、大小に拘らず、其の限界を盡し得た人の貴さを思はせられた。

### 文 一